

光明 第四卷第三号

子供に問いました。

「先生は誰を崇拜しているでしょうか。」

甲「ペスタロッチ先生です。」

乙「基督です。」

丙「親鸞です。」

丁「リンカーンです。」

戊「乃木大将です。」

己「吉田松陰です。」

私はゾットするほど恐しくなった。

私は子供です。子供は私です。

現実主義(2)

□ 日本人はその昔から楽天主義の国民であった。唯^い現実^まを楽しむこと、現実に生きることに以外に考えなかつた。彼らは華やかであり、快活であつた。僕たちはそれが尊いと思う。

× だから彼等には偉大な思索も哲学も宗教も芸術もなかつた。

□ 仏教が渡つて来てから我々国民に人生を苦しいものと教え、涙の享樂を強いた。現実を発しむかわりに、現実を呪い悲しむことを教えた。

× そのために、安っぽい楽天主義、無批判な現実主義から救われた。そして私たちに深い人生の意義を求めることを教え、私たちに哲学と芸術と、信仰とを与えた。

□ 何時の時代でも現実主義者は、笑い、楽しみ、働く、そうして榮える。

× 現実主義者が集れば国家は亡ぶ。彼等の集まるところ、酒と姦淫と、享樂の歌と、戦いがあるばかりだ。

□ けれど社会には道德と戒律がある。

× 昔、ユダヤにも道德もあり、モーゼの厳しい十戒もあつた。けれど彼等は表面で守つて裏面では平気でそれを犯した。そして彼等は、彼等の神たるエホバの神がキリストとなって降る日を待った。キリストは彼等の神ではなくて帝王であつた。キリストによって世界を征服して世界をユダヤ人のものにしようと思つた。彼等は極めて楽天民族であつた。今の彼等には国家がない。

□ 私は現実を高潮する。

× 私も現実を高潮する。

□ 他から何も借らないでただ現実に強く生きる。

× その生き方はごまかしだ。

□ 何故だ。

× 現実とか現在とか言うが、現在ということがただ考えられるか。
□ 考えられる。

× 現在というけれど、一口言われぬ先にもう逃げて過去になつてゐるではないか。げんぎい、げん、と言う時はもう、げは過去で、ぎは未来ではないか。するとただ一口、ゲンザイと言うその一語の内にも、過去、未来、現在が入つてゐるではないか。この解りきつたことを忘れてゐる君の無智から来た誤つた考えなのだ。唯一刹那の内にも、過去現在未来の三世があり、それらをはなしては時間は考えられないのだ。

□ それはわかつた。でもそれがために現在を尊重するということには変りはない筈だ。

× そうだ。こうした立場から来た現実の高潮であらねばならぬ。ここに一人の間が存在する。

□ これはただ親によつて生みつけられたにすぎない。愛の享樂から。

× それが船に乗つて海を渡る時、難船して水に溺れて死んでしまつた。

□ これは風が起つたためか、船がこわれたためかなのだ。他に何の理由もない。

× その人の親は大変悲しんだ。そして今まで明るかつた世界が急に暗くなつたように、全く人生の見方がちがつて来た。彼は何時も泣いた。その悲しさを酒にまぎらした。彼の心は荒んで世の中の人からだんだん嫌がられるようになった。このように一つの出来ごととは決して消えるものではない。

□ その親の心の弱さから来たことなのだ。

× 子を失つた親が、狂気になるほど悲しむのと、平氣でゐるのはどちらがほんとか。

□ 悲しいには違ひない。けれどそれは、忍ばねばならぬ。

× 悲しい心がないのと、忍ぶのとは別である。乃木大將は二人のお子様を失つても悲しい様子がなかつた。私はそのお心を推察することに涙をのむ。愛に精進する者の悲痛な、涙以上の涙が乃木將軍の人格だ。

□ 時は始めなく、そして又終なく流れる。私はただ人生のみを知つてゐる。時は無始無終に流れる。私も人生だけを知つてゐる。私が苦しんだのはそのためだ。

□ 見よ花は笑ひ、鳥は鳴き、太陽は赤く照つてゐる。

× その花も醜くしぼむ、鳥も死んで木から落ちて、蛆がわく。私たちは生れた。病氣がある、この充実した肉も、張りきつた皮膚も衰える時が来る。働く者は一切死の国に吸ひこまれる。これが大聖釈迦の人生の見方であつた。私もそのためには人生そのものを否定した。

□ 厭世か。

× 眞実の人生肯定は、一度人生の否定から出発する。「三界無安猶如火宅」(三界は安らげきことのなきこと猶火宅の如し)の否定から、「此土安穩・天人常充滿」の大肯定に達せられたので、親鸞様は、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのことみなもて、そらごとたわごと、まことあることなし」の大否定から出発して、この世界を、「園林遊戯地」として肯定された。

□ 僕には財産がある。妻がある。健康がある。何も否定すべき者を持たぬ。

× 無自覚の呑気よ。火事があれば家もなくなる。家運がかたむけば財産も無くなる。美しい妻も今死んでいるか知れない。話している間に、腹痛をおこせば君の健康は無くなる。

□ × 地上の者はどうしても一度、真実の否定に立たねばならぬ。

□ × けれど多くの人は、そんな、否定して又否定するような二重の手間を取っていない。

× それが違う。人生の創造には必ず否定がついている。資本主義を否定し、専制政治を否定し、人格の虐待を否定し、物質文明を否定する所に、デモクラシーの肯定がある。

□ × 人生全体を否定して何が残る。

× 人生全体を否定した我々の生命は、直ちに無限絶対の根本生命（神仏）を体験する。

□ × 何故に人生を穢土だ、苦界だと言うか。

× 自分の生命を見つめる者は、常に自分の貪欲、瞋恚、愚痴、無明、傲慢、偽善に愛想がつきる。人生には、死、呪い、悪、戦いがある。

□ × でも人生にも善がある。

× そうだ、人生にも善がある。私はその善の実行が出来ぬ。又善を実行してもそれから二、三分後に、同じ私の心が悪をする。君は君の妻が君を捨ててもなお愛し得るか。

□ × 愛し得る。彼女を赦して彼女の運命を祈ってやる。

× それは清いことだ。けれど一度も彼女を呪うことなく運命を祈り得るか。妻の仕打ちで癒すことの出来ぬ傷を胸に抱いて泣く者のみほんとの人間だ。そうしてその後には赦しはあるのだ。

親鸞は言った「人間の善には毒が雑る」と。

□ × 善に真に美に生きることは尊いことだ。そこに修養がある。

× けれど人間は死ぬるまで悪をする。年をとるだけ悪が固定的になる。

□ × では地上では何がほんとのだ。

× 懺悔だけほんとのだ。お光にあつて、自分を見つめて懺悔する、そして大地にひれ伏して礼拝する。そこに人生のほんとの歓喜がある。ほんとのよろこびがある。

親鸞は死ぬるまで若かった。「永遠の青春」に生ききった。

□ × その生活を信仰というのか。

× 然り！ 信仰の生活だ。懺悔はそのたった一つの扉である。赦されて働くこと、それを感謝の生活という。そこにはほんとの奉仕（自分の利になり又それがすぐ他人のためとなる）自利利他一如の奉仕の生活がある。

□ × 親鸞は何と言った、それを。

× 念仏だと。

□ × 懺悔とは、盗人が知られた時、悪かったと思うのと同じか。

× もつと深い、生命全体を投出して。

□ つまり救いにも、懺悔だけは自力でするのか。
× もつての外の間違いだ。お光が懺悔さしたのだ。暗闇で自分の体が腐れたのが見えるか。光に照らされて今さらながらあきれたのだ。

□ 人間は何故悪をするのだ。
× 私たちのすることは如何に小さいことでも、それがきれぎれにポツポツと出来て行くのではない。一念一行でも無始眩劫以来の因縁、因果によつておこり、永遠の未来に関係をもち、宇宙万有に響きを与える。

□ ここに一人の人間がいる。
× それは、過去未来現在に渡る因果業報によつて一人の男と一人の女との間に生れて来た。過去世一切の総勘定なのだ。それが船に乗つて海を渡る時、難船して水に溺れて死んでしまった。業報だ。因果だ。その周囲は死ぬるようになっていて、誰の力でも如何とも出来ぬ。そしてその結果は宇宙中に及ぶ。

□ 話は現実にもどる。では現実とは。
× 現実とは過去の無始眩劫この方の一切の因縁、因果の複雑な業力の現れである。現実とは未来へ、未来へと進んで行く。そして一時も絶え間なく変つて行く。

これを仏は無常と言った。学者は発展進化というのだ。

□ ただ現実に生きるといふのは浅はかな気がする。

× そうだ。過去未来現在を考えに入れた現実、しかも未来から来る光によつて輝く現実、その現実こそ尊い。

□ 何だかわかつた気がする。

囚われたる者

旅にいと子供のことばかり気にかかる。親の事ばかり考える。町に出ると本屋ばかりが目につき、足は本屋ばかりに入る。村にかえると村の色々な出来ごとが私を苦しめる。苦しんでいる人を救いたいともがく。そうして私は私の周囲に囚われてばかりいる。囚われた者の何という愉快だ。私はどうして何事でも平気でいられないのだろう。私の生命が深みへ入れば入るだけ、気になることばかり増して来る。悪魔につかれた者を見ると堪えがたくなるほど苦しい。

私は町に出て本屋にばかり囚えられる。

女が町に出た。呉服屋ばかりが彼女を囚える。

盗人が町を逃げる。巡查や交番や警察の方ばかりに気を注ぐ。

魚屋は、「魚屋さん」という声ばかりに、反古買いは反古に、商人は物価に、仲居はポチに、百姓は米に、車やお客に、いやどうも世間のあの複雑な様子は何という面白さだろうか。全て一切地上は囚われた者の生きん生きんとする悲壮でうづもつている。

私は何時も一切を捨てて隠遁したい願いが湧いて仕方がない。鋏を一枚持ったままで、一生一言も言わないでじつと自分を見つめて生きたいと願うことが多い。そしてそんな気のある時、私はきつと一番はつきりみ親に抱かれている温かさが味わえる。私が一生懸命で話している時などよりは、どれだけほんとに自分の魂に輝きがあるか知れない。

けれどこの私の願いは親の元にかえった時、一番よく曇る。親兄弟の愛が私を囚える。そして又別れた時、ほんとに親鸞様が私のあとから、「愛欲の広海に沈没し……悲しい哉」と言つて私と一諸に泣いて下さるような気がする。

私が生きている間、私は愛に囚えられる。善悪に囚えられる、欲に囚えられる。生きたい！ 生きたい！ たたかかれても、ふまれても、どうしても、立って、起きて、生きる。生きたい生きたいと奮いたてば立つだけ、より深い囚われの中に入る。因襲を飛びこえて、生命のままに進むという若々しい願いが一年ごとに強くなる。囚えられれば囚えられるだけ深くなる。そして悲しさと嬉しさとが一層深くなる。

「悪性さらにやめがたし、こころは蛇蝎のごとくなり

修善も雑毒なるゆえに 虚仮の行とぞなづけたる。」

こんななまで囚われた者の涙の悲歌を歌はれた親鸞様は、決して本願寺の中で高いところに威張つてはござらない。私と一諸に大地の上に額をあてて、み仏の前にあやまりはてていられるほんとの一個の人間である。

「大願海のうちには 煩惱のなみこそなかりけれ

弘誓の船にのりぬれば 大悲の風にまかせたり。」

親鸞様のように、囚われた者の悲しみの歌を歌う者であつて初めて、大願海の弘誓の静けさが知られて来るのだろう。私が、

「超世の悲願き、しより われらは生死の凡夫かは

有漏の穢身はかはらねど こころは浄土にあそぶなり。」

とほんとに歌い得る時は、過ぎ去った昔の愛の懐しさに泣いている時である。蔓が身体に巻きついたように、飴が歯についた時のように、脱し得ぬ囚われのもどかしさに泣いている時である。

身体に巻きついた蔓を、三本、五本切つて見た。けれど一本切らない間に、五本、十本、そして無数の強い強い蔓が巻きついて来る。皆切るか、巻きつかれるか、その一つをとらねばならぬ。智慧がだんだん開けて来ると、切りつくせぬ何億千本の蔓が見えて来る。私は力もなくグツタリしてしまった。そして囚われたままが摂取された時、囚われた者の自由さが涙ぐまれた。

隻語 日記の中から

明日を食うにも困る者の病める時、その隣で御殿のような西洋館の中で絹足袋の裏を大理石の暖炉で温めていても罪悪にならぬところに現代の悲痛な病根がある。

藤ちやんが、トントンと二階に上って来ました。破れた着物に、乱れた髪。「父ちゃんは何も貧乏なのよ、毎日ブリキ屋に行ってるけど、お母ちやんは私の二つの時死んだの」と言つて小さい汚い指を二本出した。「あとから又他のお母さんが来たけれど、十日前にお父さんがかえらした。そのお母さんは、わりいんよ、お父さんの着物持つて行つたの」と言つて二十女がするような、口と目を表情に使つた。「私は髪ゆいさんになるの、そしてお父さんにお金をあげる」と言いました。私は八つになる小さいたましいにも強い願生のあることに涙ぐまれた。

宇宙は何物の孤立をゆるさぬ。私は信頼の尊さを思う。卓々として立てる喬木が「我偉大なり」と誇る時、彼には懺悔もなければ涙もない。ただ彼岸と不遜とに鼻もちもならぬ。高く立ち得る所以のものは、その根が深く大地に食い入つて大地の恩恵を受けているのだと感謝するところ、そこには謙譲と信頼とがある。

我は全ての恩恵の総和なり。

悪魔につかれた心でしたことは、きつときつと進んだようでも逆転する。

私心なき愛の発露せる事業のみ不退の建設である。

宇宙の根本実在は、愛である。慈悲である。仁である。神である。如来である。体験するところ、我もまた神である。仏である。

キリストはただ、神即ち大愛に全霊を燃したのだ。そこには中世紀の御用哲学も超越神論もなかつたのだ。唯、絶対の救済があつたばかりなのだ。

親鸞は、「信の一念」に、止むにやまれぬ生命観に、煩惱そのままの上に

「罪障功德の体となる 氷と水の如くにて

氷多きに水多し 障り多きに徳多し。」

と罪障肯定の讃歌を歌つた。

「清くなれ。我汝を救う」という神があるなれば、人間に涙なき神である。

清き者の肯定は神の力をかるを要しない。悪をこそ救い、行きづまりをこそ救い、罪をこそ救うところに神の絶対是認はある。「悔い改めよ！」と叫ぶキリストに罪の肯定があつたのではあるまいか。

煩惱をそのまま撰取され、是認されるところに、衆生（私一人）のままが不退転の位に住する菩薩となる。

私たちの信仰を未来主義と見、現実否定の後生願いと見、罪の肯定を私たちの罪悪感と切りはなして悪無碍の道德破壊と見る者は、見ざる者知らざる者の誤謬である。

何かで人間苦を味わった人は人格の奥に深味がある。

ペスタロッチはつきせぬ愛に生きた。彼の事業は失敗した。学説には非難が多い。けれど彼の愛の教育は不朽に残る。今日は記念祭の日だ。

男の老年はお人よしで罪がない。女の老人はたいがい目先欲で争いごとの中心である。

又しても女が身を売って兄の学資を作ったり、家の傾きを救ったりする。動機ばかりでは善はなりたたぬ。貞操を責めることは如何なる場合にも悪だ。生ける屍となるほどの悪はない。

じゃが、うき川だけに身を沈めて、来る日来る日を獣欲の犠牲に暮す人たちの内にも人間の霊を失わないで、霊は奈落の底から飛躍して久遠の光を見つめている人があるかも知れぬ。

私は人と別れる時ほど厳肅な気分になることはない。二日でも三日でも否半日でも信じあつて語つた人と別れる時、言いようのない淋しさが湧く。「もうこれぎり永遠に、又とあう時はないのかも知れぬ。」と思うと堪え難いほど淋しい。私たちはどうしても経験論的に、機械論的に世の中を見ることは出来ない。私とふれあう人たちと私との間の無始の過去からの因縁、業繋を思う時、電車の中でさえ人がなつかしい。

「これぎりもう遭うことはないかも知れぬ。」という感じは自分の家に帰って父や母や兄弟と分れる時でさえも考える。

ただ漫然と現実を過したくない。

「古往今来無始無終の時の流れの中に、今日はまたとない。」

「お前の過去が知りたくば今日のお前を見よ。お前の未来が知りたくば今日のお前を見よ。」と聞く時、じつとしてはいられぬ気がする。

「もつと本気で」朝の時はもう去る。

試鍊の苦杯

「悲劇の苦杯」

かつて同志社大学の教授であった日野真澄氏の著書「悲劇の苦杯」を読む。日野氏は、大正八年一月二十五日午前三時、突然同氏の宅を見舞った怪火事のために、恵美子さん（十七歳）を頭に五人の愛児を失われたのである。五人の愛児は焼死し、家屋は全焼し、家財書籍等全く烏有に帰したのであった。この世にまたとあり得ないようなこの悲劇、女学校に中学に小学校に通っていられる蕾のようなお子様を一夜の中に怪しい火事のために焼き殺された日野氏の心中、これほどの気の毒がどこにあるか。思わず熱涙をのんだのである。

東本願寺句仏上人の涙

涙は涙と相通ず。句仏上人大谷光演師はかつて政子姫を失われた。当時上人の歌や詩は私を泣かしむるに十分であった。日野氏の「悲劇の苦杯」の巻頭に上人の句がある。「未曾有の災厄にて五児を失われたる日野氏が思い出の椿五本を植えられたるに深き哀悼の誠を捧ぐ」と題して

「花落つる夕暮ほさそこの椿 句仏」

日野氏は言うまでもなく基督教信者である。けれど仏教徒たちの間に小さい争いが止まない時、こうした句仏上人の清い涙はこの上なく尊い。句仏上人は言う。

「予が体験した一事件ばかりは、黒インクで書き付けたそれのように時の流転には何の交渉ももたない永遠な追憶を新にする悲しい記録を残している。それは『吾子の死』という一つの事件であった。永久に予が脳底に浸み込んだこの痛感、自己のある部分を削り取られたかのような感じもする。予は四人の児をもった。そして唯一子を亡った。しかもそれが四人中三人までも亡くしたような寂寞が湧く。一人の子を亡つても、こうした悩みがあるのに日野真澄氏が嘗められた苦杯は実に惨中であつた。五人の愛子を一時に亡くされた惨劇は避くべからざる運命ではなかつたときく。この事件が人格者に対する運命の試練とも言われよう。……」 悲惨な試練の苦杯を手にした者のみ真に涙を捧げることが出来るのであろう。

超える力

誰が何時どんな厳しい試練に遭うか知れない。あらゆる人間苦、人間苦と言つただけで涙がこぼれる。血の試練。キリストは十字架の上に血を流した。そうして神の子の試練に打ち勝つた。親鸞は流された。承元の昔、法然上人を中心に黒谷の教団は迫害のためにお上の罪科にとわれ、あるいは殺され、あるいは流されて。浄土門の歴史の上に血涙の頁を作つたのである。あれほどまでに敬慕された法然上人と生別をせられた親鸞聖人は何と言われたであろう。越後の荒涼たる配人としての生活の中にも、

「大師聖人（源空）もし流刑に処せられたまわらずば、われまた配所におもむかぬや。もしわれ配所におもむかざるば、何によつてか辺鄙の群類を化せん、これなを師教の恩致なり。」

と、こんな惨劇に出遭はれてさえ、こんな苦杯を手にしてさえ、こんな厳しい試練にさえ、こうした微笑をもつて試練を突破されました。

かゝる涙の試練を受けられることによつて「心を弘誓の仏地に立て、念を難思の法海に流された」無碍の道味は加わり、呪いや絶望のあるべきところにも不可思議な願力からの権威ある信念が聖人を一層大きくしたのでしよう。

けれど立つて

弱い者は、苦しみに出会つて絶望する。楽しみに溺れて墮落する。妻を持つことも試練である。夫を持つことも試練である。家庭を持つことも、子のあることも、貧しいことも、多忙なことも、世の中の迫害も、全てあらゆる人間苦は、それが尊い私への試練である。

一目見て懐しい人、底光りのする人、温い人、それはきつとその裏に苦しい人間苦の杯をもつた人である。

人間にはきつと試練がある。絶望してはならない。呪つてはならない。

愛する者が裏切つた時、愛する者が死んだ時、悲しい運命が見舞つた時、泣けるだけ泣こうではないか。「今宵一夜泣き明かすこそせめてもの心やりなれ泣くということ」それが囚われて生きる者の正しさなのだ。

夫の仕打ちに泣き、妻の冷たさに怒り、他人の侮辱に立腹し、子供の不孝に世を呪い、親の勝手に自暴を起し、友達の不実に愛想をつかすことも人間としては止むを得ないことだ。

寒い時には寒いのだ。熱いのはやはり熱い。嬉しい時には歌つたがいい。

けれど一度涙をふこう。そうして立とう。呪いの火炎が口から出る。一口出る、二口出る。口を閉じよう。そうして立とう。帯をしめかえて、行儀よく坐つて、はつきり自分を見つめよう。そうして新たな自分を見出そう。

自然の恩恵

大地は今春の温かさに恵まれて芽はふくらみ、花は笑う。春はいいにちがない。けれどあの切るような寒い冬を考えないで春はない。暑さ寒さの中にも恩恵がある。冷たい氷のような人の仕打ちも、涙の幾夜の続く不幸にも、死んでも足らぬ逆境にも、それにはそれに、自らなる恩恵がある。

召さるれば生命も捧げよう。

一途の願いの前には道德すら飛び越えよう。

病は苦し。されど病なくしてどうして他人の病に誠が捧げられよう。

無限の彼方をにらむ

偉人とは、聖者とは、尊い試練を与えられた人だ。そうして、その試練に勝つた人だ。キリストも、親鸞も、松蔭も、西田天香も、私も、皆、凡夫である。凡夫でありながら彼等は皆尊い聖者であり偉人である。彼らは願生に生ききつた。そして尊い試練を見出した。私はただいい加減に暮そうとする。尊い試練に生ききらない。だ

が私の霊は常に無限の彼方をにらんでいる。無限絶対広大無碍の白道の上に立つた私の生命はただ願生に生きんとしている。信仰はただ極樂参りをすればいいような人たちの如く、どつきりお救いに腰をかけることではなかつた。試鍊、よしそれが地獄であろう閻魔であろうが、火の河であろうが、水の荒波であろうが、恐るることなく永遠の精進にのぼることであつた。お光に燃える私が。(二月五日)